審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名　陸　丹

池坊立花は多種多様な植物を用いて自然風景を表現するいけばな様式であり，室町時代に成立した。立花を記録する史料として花伝書，花書，花形絵がある。とくに花伝書は，立花の制作に関する秘事奥義を記しており，立花の構成理論が構築される天文年間に多く現れている。17 世紀前半，池坊立花の理論が確立されると，花伝書とは相反する性格を持つ花書が刊行されるようになった。両者はともに立花の制作技法を記載するという共通点があるが，特定の受伝者のみが眼にする花伝書に対し，『古今立花大全』をはじめとする花書は，立花の大衆化を図るために一般に公開される書である。さらには，立花を写実的に写す花形絵が江戸初期から現在まで作られ伝承されてきている。これらの花伝書と花書，花形絵は同じ流派によって継続的に作られて残され，系統的に池坊立花の変遷を追うことができる価値ある資料である。しかし，そうした価値ある資料が存在するにもかかわらず，池坊立花の風景表現に関する研究成果は少なく，立花の風景表現の技法と風景観に関する検討は課題となっている。

以上の背景と問題意識をふまえ，本研究では，①池坊立花の概念，構成および表現内容の変遷を把握し，池坊立花において風景表現が生起した理由を明らかにし，その後の発展を把握，整理すること，②池坊立花の構成，素材，表現技法に着目し，立花における風景表現の特徴と変遷を明らかにすること，③池坊立花における風景観を把握，整理し，日両者の相違点と関連性を明らかにすること，の 3 つの目的が設定されている。

まず，第 1 章では，いけばなと立花の歴史を概説した上で，研究の背景と目的，研究の位置づけを示し，研究方法，用語の定義，論文の構成について述べている。

次に，第 2 章では，立花の役枝，使用される植物，立花の表現内容から構成の発展過程を把握，整理している。その結果，初期の立花の構成は「真」と「下草」で構成されたのに対し，室町時代に「真」「副」「正真」「請」「流枝」「見越」「前置」と 7 つの役枝に発展し，江戸時代におけるあしらいの出現，そのあしらいの分化と役枝の発展を経て立花の構成が完成されたことを把握，整理した。また，立花に用いられる植物とその配置には複雑化と多様化があり，立花構成の確立以後においては，植物の多様な部位と生木と枯れ木などその異なる状態が制作意図を持って使用されていることを明らかにした。さらに，以上の整理から，次章以降の風景表現の変遷を把握するための立花構成の

捉え方の枠組みを提示していた。

第 3 章では，第 2 章の整理をふまえて，立花の構成に表現される遠景から近景までのそれぞれの視距離帯の風景認識を取り上げ，風景認識の空間的広がり，注視対象，連続性について時代による変遷を把握，整理している。また，立花に使用される植物の種類と配置が表現する風景的意味を把握，整理している。さらに，造園用語を援用し，立花の風景表現の技法を「見立て」「縮景」「借景」「その他」の 4 つに区分して把握，整理している。その結果，立花の風景表現においては遠景から中景，近景まで，重層的な空間スケールによる風景認識があること，作品の制作目的によって用いる植物やその植物の状態が選択されていること，時代の経過とともに見立ての技法による表現が具体化，多様化し，技法の成熟によって借景的技法が消滅し，実景を立花に描写する縮景が生まれたことなどを明らかにしていた。

第 4 章では，立花の風景認識と風景表現の技法の発展過程を総括し，池坊立花の風景観，日本社会が共有していた風景観との関係，差異について考察している。その結果，植物素材や表現空間の大きさの限界から池坊立花の風景観において見立て表現が重視されるようになった背景を指摘し，表現内容として生活圏の眺望を含む身近な風景が重視されてきた特徴を明らかにしていた。

以上，本研究は，いけばなに精通する筆者が価値ある史料を系統立てて丹念に整理，分析し，わが国を代表する様式である池坊立花について風景表現の技法と風景観の変遷を明らかにしたものである。立花の構成から風景表現，風景観を読み取った結果はきわめて価値の高い研究成果となっているほか，既往の知見にみられる誤った記述や理解に再考を促している。また，これまで詩文や写真，芸術等の分野で論じられてきた風景観の論考にいけばなというこれまでほとんど論じてこられなかった新しい視点を加えており，学術上，当該研究領域の前進に大きく貢献している。よって，本論文は博士（農学）の学位請求論文として合格と認められる。